

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成21年10月5日発行(毎月5日1回発行)
第49巻10月号(通巻603号)

風土



10

醉芙蓉
神蔵器

百日紅ピカソの「近衛兵と鳩」

秋めくや豆腐の角の切り立つて

膝入れて子規の机に赤のまま

身の丈の竹の箒や盆の過ぐ

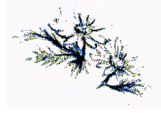
蝶おちて地獄の蓋の開く日かな

大志抱く蟬の一生わが一生
齒に当てて一粒の晴れ毛見の衆
凶か吉か五風十雨に芋の花
河骨の花をぬらさぬ南谷
飯噴くや走りて庭の茗荷の子
豊年やスイッチ三分寝釈迦仏
待つといふことには慣れず酔芙蓉



竹間集

同人作品



滝

岩木

茂

あけぼのや音して滝の現はるる
一の滝二の滝見ゆる三の滝
この滝を前に篠竹皮を脱ぐ
眼を縦に伸ばしきつたる滝見かな
回廊の梁に玉葱干し連ね
金堂を暗める雨の紅蓮
蓮の葉の傾いてゐる日本海

涼し

中谷 葉留

国道の真正面に虹を追ふ
だしぬけに犬に吠えらる青鬼灯
直角に歩く庭先梅を干す
人を見ぬ城社の木椅子涼しかり
城址より寺へゆくみち合歡の花
青梅雨の無人の寺に詣でけり
しかられて叱つて親子葛ざくら

尺 蠖

小林 輝子

栗の花はなし途切れしとき匂ふ
木綿着て梅雨のさなかを祝ぎの座に
くちなはに訪はるる三艸書屋かな
尺蠖に計られてゐる詩心かな
子規の食ぶ熊の子別れいちご摘む
森を梳く風の自在や雲切草
碑に納むあぢさゐの青額の藍

梅雨の雷

小野寺節子

くちなしや思ひ違ひの裏通り
扇風機強に弱にしペン走る
電線の雨を降らせる梅雨鴉
蠅取りくも夜の仏間を小走りに
留守居して昼風呂わかし髪洗ふ
青柿や先祖の畠守りゐる
去来する思案をさらふ梅雨の雷

無題

小林清之介

夕虹はや湯上りの吾に消えてなし
鰻余す八十八歳八か月
油蟬^{ひかり}眩きみんみん蟬歌ふ
七月の曆大きく引つ剝がす
稲妻に逃ぐる雀を追ふ雷鳴
小林^{若き日の暑中休暇を思ひ起すに}てふ姓多かりし夏点呼
米寿^{一片の若さ今も残るか}吾がかの浴衣女と肩触れし

夏雲

田村すゝむ

飛魚に先を越さるるマリンバス
生と死の身ほとりを飛ぶ蚩かな
東の間の天あり地あり揚花火
今年また京より届く銚粽
炎天を来て心音を整へる
夏雲^{講一歳}を掴みて立ちて二歩三步
流灯会放しそびれてゐたりけり

瞬時あり

瀬戸 悠

理科室に目高金魚と飼ひ分けて
風鈴や薩摩切子の紺が好き
凌霄に雨さんさんと七七忌
刃物研ぐ家ぬちしんと夏深し
河童忌の闇ずたずたにありにけり
殻ぬけし蟬透명한瞬時あり
水槽の竜の落し子夏深む

青水無月

— 山路 紀子 —

浮島に青水無月のひかりあり
雲の峰立ち休みして歩荷かな
郭公の銜返しに啼き交す
女子高生散らばるお花畑かな
滝雲の滝壺つばめ飛び出せり
はらはらと天空へ消ゆ夏の蝶
汗涼し麓の町を一望す
雪溪に真向ひ展望レストラン
夏霧や山岳氣象観測機
ハーケンが残る岩場や夏の果

山河集

同人作品



神蔵
器選

納屋の扉を開けて大暑の風通す
生田 作

戻り来て鍵つかみ出す西日中

梅雨明くる目高の襖に空映り

父祖の地の一夜に太る胡瓜かな

峰雲のうしろより来る夕べかな

ミロの赤クレーの黄色砂日傘
山本 浪子

霞去りて大聖堂は人を吐く

大切な人と見上げし虹二重

香水のこの香に執し五十年

ヒンドウの乙女等集ふ泉かな

車椅子片足で蹴る雲の峰
島 玲子

浮世絵のうちのは動く暑さかな

木槿咲く町に防災小公園

蛇の衣はづして薪を下しけり
齒ブラシの一本ふえし朝雲

青蜥蜴出でしは虚子の矢倉より
遠藤道遙子

ずぶ濡れの鎌倉散步男梅雨

長きパン抱へて帰る巴里祭

冷奴ドイツの旅の締めくくり

骨抜きを教へられつつ鮎を愛づ

霊柩車炎天押して扉開く
池田 光子

醬油屋の桶塩噴いて日の盛り

蓮の葉を磨き上げたる白雨かな

夫とゐて母亡き桃を吸うてをり

蚊を打つて言ひたき事を逃したり

◇特別作品◇(抄)

蝦夷(えみし)

岡田 真澄

さわさわと水の急げる秋の川
石叩一羽来てゐる能舞台
火の山に日の移りをり雲の峰
たまゆらの命ありけり草の露
秋霖のはざま耀ふ薄日かな
銅鑼叩き牛をあつむる霧襖
霧ぶすま晴れて牧場の馬近し
天高し十勝の牧の草ロール
蒼穹や豆粒ほどに鶴現るる
大空を鶴来て蝦夷耀へり

風土独語／神蔵器



梅雨の月七施の一つ二つ三つ

林 いづみ

七施は無財の七施といって、地位や財産がなくても誰しもがいつでも容易にできる布施の行として「雑宝蔵経」に挙げられている七つの施である。

- 1 眼施、優しい温かいまなざしで人に接する。
- 2 和顔施、優しいほほ笑みをもって人に接する。
- 3 言辞施、優しい言葉をかける。
- 4 身施、肉体を使って人のため社会のために働く。
- 5 心施、心から共に喜び共に悲しみ、感謝する。
- 6 床座施、自分の座席や地位を譲る。
- 7 房舎施、雨露をしのぐ場所などを分け与える。

以上の七施であるが、言語は固くむずかしいが、要は人間が良好な人間関係を維持するため、当然あるべきこと、ライフハックであろう。

降りつづく梅雨の中止み、洗われたようなきれいな夜空に、思いがけなく見出した月の感激はどうであろう。陰うつな梅雨の日の続く最中であるから、久々の月のみずみずしい清らかさ、美しさもさらなる思い、手に取りたいようなつかしき優しさに心が洗われる。梅雨の月でなければ「七施の一つ二つ三つ」は生まれない。

ミロの赤クレーの黄色砂日傘

山本 浪子

海水浴場の風景、砂浜には赤や黄、臙脂に青の縞、白と黒のだんだら模様などさまざまの砂日傘で賑わい、すこぶる美しい。作者は砂浜をいろどる華麗な色彩をミロの赤とクレーの黄色によって全体を象徴、妍を競わせた。

因みにミロはホアン・ミロ、スペインの画家「赤い太陽が蜘蛛をかむ」「自然を前にした人々」「雲雀を追う赤い円板」など、日本へも大阪万国博覧会に来たことがある。

クレーはパウルクレー、スイス生まれ、「田園詩・リズム」「まじめな表情」「民族衣裳を着た女」などに黄色が多いようだ。

「ミロの赤クレーの黄色」は、普段から絵画等によほど親しんでいなければとっさに浮かぶものではない。見事である。

七月のガラスの森に「オー・ソレ・ミヨ」

安永 圭子

箱根ガラスの森美術館では、家族で楽しむ夏時間として、庭園を見渡すオープンテラスのカフェレストランで、イタリア人の歌手によるカンツォーネの生演奏があったようだ。「オー・ソレ・ミヨ」はおそらく作者もよく知る歌で、歌手と共に思わず口ずさみ、久し振りに心のはずむ時間を楽しんだのであろう。七月の季節がよく生きている。

風土集



神蔵器選

炎天をけむりのごとくすれ違ふ

高槻

浅田 光代

ウインクの木喰羅漢雲の峰

前方のダリア後円の茄子畑

八月や丈草結ぶあそびして

合歓咲くや蕪村の母の与謝郡

京都

橋添やよひ

洛中の地下水太し葛桜

眼圧の高さ告げらる日雷

清滝の闇引き寄せて蛩とぶ

凌霄花丸に二の字の廟所かな

風えらぶ江戸風鈴でありにけり

東京

林 いづみ

うひうひしき湧水のごゑ茗荷の子

梅雨の月七施の一つ二つ三つ

竹煮草遺跡調査地シート掛く

天平の伽藍の跡や夏燕

うねりくるガムラン夫の夏帽子

東京

奥田 茶々

腰布を巻けば島人凌霄花

アカペラのボーイソプラノ合歓の花

助手席に平らに乗せて青鬼灯

夫の忌の近し渋谷の雲の峰

歯を抜かれ関東平野梅雨に入る

横浜

近藤幸三郎

硝子戸に被り直せり夏帽子

父の日の櫛一束購へり

打つたびにふくらむ闇や盆太鼓

六つ七つ八つに増えし烏賊火かな

香水の踊り子挑む眼かな

相模原

奥山 絢子

でで虫に一滴雨の葉擦かな

雨やみて定家葛の花の終

文字を置く一柘ごとや青葡萄

羅やニコライ堂の門を出づ